

小説・黒井弘騎
挿絵・竜胆



粘獄のリーゼ

appetizer

試し読み版

18
未 満

小説 黒井弘騎

挿絵 竜胆



粘獄のリーゼ
appetizer



登場人物紹介

Characters

リーゼ・ヘルデブランド

「イバラの姉妹」の一人。

極めて意志が強く、性格は勝気で強気。またプライドが高く、攻撃のかつ挑発的な言動が目立つ。反面、少々調子に乗りやすい部分もある。

歯に衣着せぬ厳しい言動は辛辣な印象で、近寄り難い雰囲気を漂わせている。だが実際には人間味溢れる性格で、シスターらしい友愛の心を持っている。

ただし人付き合いは苦手で、協調性は皆無。特に人に優しくする事に慣れておらず、感情表現は拙い。

女と見れば襲う事しか考えない下劣な悪魔は、彼女にとって蔑むべき存在でしかない。そんな下衆を断罪する「イバラの姉妹」の聖務には、使命感以上の優越感を抱いている。

イバラの姉妹

法王庁滅魔省特務機関エージェントの総称。

教会が定める神の敵「悪魔」に対し実力で行使し、打ち滅ぼすための戦闘部隊。

神の慈愛を説く教会において、神の御業である「奇跡」を唯一戦いのために使う事を赦された存在である。

すべてが女性聖職者（シスター）で構成されている。普段は通常のシスターとして教会や修道院で聖務に従事している。しかし法王からの勅令が下れば、実行部隊としての活動を開始する。

不浄の存在の返り血にまみれ、戦いと言う罪を犯すという、血塗られた道をゆく。

ゆえに不名誉な「イバラ」の名称を頂いている（茨の花言葉……下劣、後悔、良心の呵責）。

「ふうっ……やれやれ」

寂莫たる夜闇の中、不機嫌に息をつくシスターが一人。伸びやかな美脚を包むロングブーツが、苛立たしげにに敷地を踏みつける。

「……ようやく、着いたわね！」

ここまでの道中をよほど急いできたのだろう。漏れる吐息は荒く、修道服に包まれた巨乳は大きく上下を繰り返していた。

だが端正な美貌には、疲弊の色は少しも浮かんでいない。肉体的な疲労など、鋼の信心の前では何の意味も持たないのだ。夜闇に輝く切れ長の瞳は、ひたすら真っ直ぐに前だけを見つめている。

美しい——いや、美しすぎるシスターだった。年の頃は二十前後か、大人びた美貌も、スタイル抜群のボディラインも、女性としてもつとも輝く一瞬だからこそ許されたもの。だがあまりにも魅力的なグラマラスボディは、聖職者としては罪深すぎるものだった。

凛々しい美脚はすらりと長く、目が覚めるほどに艶かしい脚線美を描いている。むっちりとした太ももは瑞々しい躍動感に溢れ、そこから続く豊満なヒップはむしろぶりつきたくなるほどに肉感的。たわわに実った胸乳は窮屈な法衣では収めきれないほどで、薄生地をパンパンに押し上げて自慢げに自己主張を憚らない。Gカップもの巨乳は零れそうなほどの肉量を誇りながら僅かにも形を崩しては折らず、つんと先端を尖らせて挑発的に突

き出している。いかな聖人君子とて惑わされずにはいられまい。瑞々しく熟れきつた媚肉の魅力たるや、人を罪に誘うエデンのリンゴさながらだ。

そのように豊富な肉付きを誇りながらも身体の線はあくまで細く、くびれた腰など今にも折れそうなほど。異性は言うに及ばず、同姓までもが羨むに足る、悪魔的とさえ言える完璧なボディスタイルだ。

悩殺的な肢体を包むのは、深い紺色の修道服。だがそのデザインは、通常の聖衣とは大きく趣を異にしている。ストイックに露出を隠す禁欲的な修道衣とは違い、極めて露出度が高いのだ。

極薄の生地はびっちり肌と吸い付き、メリハリの利いたボディラインをいつそうセクシーに強調している。ノースリーブの袖口は綺麗な腋窩えきかを露に晒し、タイトすぎるミニスカートの裾はむちむちした太ももを挑発的に覗かせていた。伸びやかな四肢はそれぞれラバー質なグラブとブーツに包まれ、フェティッシュな魅力を濃密に匂わせている。媚肉を隠すどころかむしろ強調して見せつけるボディコンデザインの中で、そこだけは清楚な聖性を感じさせるシスターヴェールは、むしろ罪深い背徳美を演出していた。

挑発的なルックスに似つかわしく、顔立ちもまた凛美なものだった。切れ長の瞳に真っ直ぐな眉、すつと通った鼻筋に薄い唇。クールな麗貌に、ダークバイオレットのストレートロングがひどく似合っていた。吊りあがった瞳は鋭く、近寄り難い険しさを醸し出して

いる。鋭く研ぎ澄まされたその美しさは、まるで雌豹を思わせる危険な代物だ。

心を惑わす魅惑の肢体に、挑発的なボディコンスタイル。好戦的で気丈な麗貌——神の友愛を説く聖職者とも思えない魔性だが、そんな剣呑さが、逆にシスターの魅力を何倍にも増していた。迂闊うかつに触れれば只ではすまない、そうわかっている、いやだからこそ手を出したくなる危険な魅力——言うならば、鋭い刺を持った美しきバラ。

そう。彼女こそは美しさの中に毒持つイバラの姉妹。

彼女の名はリーゼ——リーゼ・ヘルデブランド。聖職者でありながら、人を救うのではなく魔を滅すために力を用いる血塗られた存在。教会の暗部たる殺戮部隊『イバラの姉妹』の一人だ。

聖職者らしからぬ魔性の美貌も、人の煩惱を煽り立てかねない罪深き媚肉も、その出自を鑑みれば取り立てて責めるべきではない。

『イバラの姉妹』は、迷える子羊を導く神の使者ではない。彼女たちの目的は、救済ではなく殺戮。神の愛の証たる奇跡の力を、御身の意に叛き殺戮のために用いる血塗られた使徒。それが彼女たち——『下劣』の花言葉を持つ『イバラ』を冠する断罪者なのだ。

光だけでは、すべての闇は払えない。

愛だけでは、すべての人は救えない。

地獄より現世に這い出した邪悪なる災厄——悪魔は、無垢なる者をその毒牙にかけ、人

の世に災いをもたらし続けている。教会の祈りだけでは、神に逆らう邪惡の権化を退ける事はできないのだ。

そんな神敵の淨滅こそが、『イバラの姉妹』の役割。リーゼもまた、近隣を脅かす惡魔の討伐を命ぜられ、この辺境の地に足を運んだ。村人の話から辺境の洋館に災厄の原因を見出したリーゼは、長きに渡る苦難の道のりを越え、今ようやく惡魔の巢窟へと辿りついたのだ。

(…：苦難の道、か)

はあつ、と深く息をつき、リーゼは靜かに眼を閉じた。臉の裏に、これまでの道程が思い浮かぶ。

神の愛はあまねく平等に差し伸べられる。名もなき辺境の村に派遣されたのが数日前。平和だった日常は数多の怪異に侵され、陽の及ばぬ村外れは異形の影が跋扈する人外の魔境と化していた。

美しきイバラの姉妹は、怪異の原因は村外れに位置する洋館にあると結論付けた。『嘆く館』と呼ばれるその洋館は、かつてはこの地方を治める領主のものであったらしい。そしてその領主は、教会が邪法と定める異端の魔術、鍊金術の学徒でもあった。

神をも恐れぬ邪法が、罪深き存在を偶然に呼び寄せたか。あるいは、忌まわしき実験の招いた必然なのか？ 真相を究明し再びこの地に平穩をもたらすべく、イバラの姉妹は単

身敵地へと向かう。

だが彼女を待ち構えていたのは、想像を絶する淫靡な受難だった。

洋館へ唯一続く地下水路は、今や異形の巣窟と化していた。鍊金実験の廃液により水質は汚染され、床も天井もヌルヌルした粘液に覆いつくされた粘獄の迷宮。そこを通った聖女の肢体はベトベトに汚され、紫色の長髪も紺色の修道服も、べつとりとヌメリきつていた。

(もうっ……まだこんなに染みこんでる。本当、不愉快だわ……！)

ぴっちり乳峰に吸い付いている濡れ生地を引っ張り、リーゼは不快感も露にため息をついた。濡れた衣服は未だにベトつき、ブーツの中までもがぐつしよりと蒸れてしまっている。結局、無事地下道を抜けた今も、未だに不快な粘着感に囚われたままだ、

そして、不快だったのはそれだけではない。光差さぬ地下道は、見るもおぞましい怪物たちの巣窟だったのだ。閉鎖世界の狂獣にとって、若く美しい闖入者は滅多にないご馳走きょうあひ。狭隘な通路の中では壁から染み出すスライムに全身を弄られ、水中ではおぞましい寄生虫に尻穴を狙われた。かと思えば鍊金術の産物である半人半魔の魔生物に襲撃され、あるいは地下道に生息する数千匹ものナメクジに輪姦される。

それらのすべてに熟れきった媚肉を執念深く責め懲られ、リーゼは粘獄の中で、何度も罪深い肉悦を叩き込まれる事になったのだ。

「本っ当……最悪だったわよ！」

地下道での痴態を思い返し、苦々しく吐き捨てる巨乳シスター。神に愛された肢体の美しさは彼女自身も誇りに思っているが、それ以上に下衆どもの肉欲を煽り立ててしまうのは悩みの種だ。襲いかかってきた魔物たちの責めの執拗さたるや、今思い出しても吐き気がする。

だが、彼女に手を出した魔物どもが見たのは、天国ではなく地獄だった。どれほど美しく魅力的であつても、彼女はイバラ——触れるものすべてを切り刻み拒絶する、峻烈なる孤高の毒華なのだから。

「ふん……せいぜい地獄で悔い改めるのね、身の程知らずのゲスめ」
神の花嫁に手を出した愚者に、神罰が下るは必然。醜い魔物たちの末期の姿を想起すれば、なんとか溜飲も下がろうというもの。端正な美貌には、およそ聖職者とは思えない不敵な微笑が浮かんでいた。

「ああ。主よ感謝します。わたしに、このようなお力をお与えくださったことを……」
不埒な魔物に罰を下したのは、神ではなく彼女自身。断罪の執行者は両手を組むと、その場で短く聖句を唱えた。

「主よお許しください……わたしの為した殺戮さつりくと言う罪を」
これまでの悪態と一転、一心に神に祈るその姿はひどく敬虔けいけんだ。

ただし彼女が祈るのは、魂の安らぎなどではない。

「そして……今宵もまた、罪を重ねるこのわたしを！」

新たな戦いと殺戮を予告する、イバラの姉妹の峻厳しゅんげんなる誓い。

リーゼ・ヘルデブランドの本当の戦いは、これからなのだ。

※

※

※

主人を失った洋館の内部は、やはり荒廃しきっていた。館内の施設は殆どがその機能を失い、埃まみれの廃墟と化している。

そんな中、唯一雰囲気を変える部屋があった。見るからに豪華ごうしゃな扉からは眩く明かりが漏れ、何やら食欲をそそる良い香りが立ち上っている。あまりに不自然なその部屋への扉を、リーゼは慎重に開いた。

「あらあら、これはまた……とんだ大歓迎ね」

視界に飛び込んできたのは、想像もしていなかった光景だ。

広く、豪華な部屋だった。内部はしっかりと清掃されており、シャンデリアに照らし出された床には塵の一つも見当たらない。部屋の中央には、二十人がけの豪華な食卓が置かれていた。テーブルクロスの上には、贅の限りを尽くした様々の料理が並べられている。

何から何までがあまりに不自然で、室内のすべてがこれは罠だと自己主張していた。

「しかし……ううん。これは美味しそうね……」

だが疲弊しきつた肉体にとつて、並べられた料理の数々はあまりに魅力的だった。色とりどりの配膳は見ているだけで食欲を煽り、グラスに注がれたワインが乾いた喉を誘惑する。徹底的に私欲を排除すべき聖職者として、根源的な生理的欲求までは抑えられなかった。「……ごくり」

細い喉が、艶かしく脈を打つ。馥郁^{ふいく}たる香りに誘われるように、ゆつくりと、リーゼは食堂へ足を踏み入れた。そして――

「本当に……美味しそうな悪魔だこと！」

ブウンッ！ 風切る音と共に、しなやかな美脚が唸りを上げる。ブーツの爪先を思い切り振り上げると、リーゼは遠心力をつけて真後ろに回し蹴りを見舞った。凄まじい勢いのアクションにタイトスカートがまくれ上がり、セクシーな黒ショーツが露に覗く。

「ふんッ！」

だが、イバラの姉妹はそんな些事に頓着しない。悪魔を滅ぼす――聖務を前にしたシスターは、一人の女の前に一本の剣なのだから。

蠱惑的な太ももに秘められた凶暴なまでの力を解放し、必殺の蹴撃が「それ」を射抜く。ブーツの先から、肉が潰れる達成感が伝わる。

「グ、グオオオッ！」

直撃を受けたそれは、醜い悲鳴を上げ数メートルも吹き飛んだ。ガシャアアアン、と音

を立て、テーブルの上の料理がぶちまけられる。

「料理で釣って油断したところを不意打ち？　こんな手が通用するとも思ってるかしら。やり口も下衆なら外見も最悪ね……悪魔！」

「グ、グ……クククク。これは手厳しい……」

烈火の一蹴を受けた悪魔は、ゆつくりと身を起こし笑った。

醜悪な怪物だった。ぶよぶよと収縮を繰り返す脂肪の塊、そこからは何本もの触手が生え、粘っこい白濁液を噴出し続けている。頭頂部では巨大な口が開き、だからだと唾液を吹き零し続けている。臍物じみた姿たるや、一見したただけでは生物とさえ思えないほどだった。

「しかしあまりではありませんか美しいレディ？　この魔界最高の料理人にして美食家、魔界貴族ン・ザユが腕によりをかけて作ったおもてなしの数々を、こんなにメチャクチャに……勿体無いですなあ」

肉袋じみた外見とは裏腹、肥満悪魔の言葉使いは紳士的だった。理知的先端に口腔を持った触手が床に伸び、散乱した料理を喰らう。

「ンむ、美味アい！　まったくとしていてそれでいてコクがあり……ふおおお！　どうですかイバラの姉妹、貴女も一口」

「ふん、床に落ちた残飯を勧めるなんて、とんだ三下料理人ね」
異常なテンションの美食家悪魔を、リーゼは冷淡に見下していた。

「確かに料理は美味しそうだっただけ……わたし、女を見るだけで涎垂れ流すような早漏と一緒にディナーを楽しむ趣味なんてないの」

強気なイバラの姉妹にとって、悪魔など滅ぼすべき肉塊に過ぎない。それが心身ともに醜悪な下衆ならばなおの事だ。

「だから……今すぐ滅ぼしてあげるわ、悪魔ッ！」

一閃！ 凜々しく吐き捨てる、リーゼは猛然と悪魔に挑みかかった。肉感的な太ももをむつちりと躍動させ、狩りをする雌豹のごとき瞬発力で突進する。ブーツの爪先が、再び唸りを上げて空を斬る。

「聖なるかな、聖なるかな……轟け、峻^{ベルオプザラストレイエム}厳たる葬送の鐘！」

キーンッ！ 伸びやかにしなる美脚が、刃のごとく悪魔の身体に襲いかかる。外見どおりに鈍重な悪魔は、反応する事さえできなかった。

(殺った！)

肉が潰れる手応えに、紫髪の執行者は嗜虐的な笑みを浮かべた。

リーゼ・ヘルデブランドの身体能力は、イバラの姉妹の中でも随一のもの。電光石火の近接戦は、彼女の必勝パターンだ。だが……

「フ、フフフ……フハハッハハ！」

「!？」

これまで数多の魔物を滅してきた聖技を受けても、ン・ザユはまったくダメージを受けていなかった。脂肪まみれの腹部がぶよん、と震え、めり込んだヒールをそのまま押し返す。艶やかなラバーブーツには、濃厚な白濁がねっとりときびり付いていた

「クク、見ての通りです。美食の限りを尽くしてきたおかげで、この肉体は脂肪の塊です……ふふふ。そこに加えて、衝撃をヌメらせる自慢の体液。単純な打撃など、わたしには通用しませんよ」

「……ッチ！」

高説を述べる魔貴族に対し、リーゼは短く舌打ちした。

(こいつ……見た目も最悪だけど、相性も最悪じゃないの！)

卓越した身体能力を活かした近接戦こそ、リーゼの真骨頂。だがン・ザユの肥満した肉体には、得意の格闘戦では有効打を与えられない。

「……だったら！」

だが、聖女の戦意はその程度では削がれない。強気に睨を引き締めると、リーゼは次なる手に打って出ようとした。まずは体勢を立て直すべく、その場を飛び退いて一旦距離を取る——事は、できなかった。

(っ!? な、何……!?)

踏みしめた床が、グニヤリ、と柔らかく歪む。泥濘のようにぬかるむ床に足を取られ、

思うように跳躍できない。それどころかヒールが床に沈みこみ、動きが取れなくなってしまう。

「こ、これは……!?!」

足元を確認し、リーゼは驚愕した。今まで豪華なカーペットが敷かれていた部屋の床は、ぶよぶよと蠢く肉の塊へと変質していたのだ。壁や天井も同様に変質し、粘っこい白濁をダラダラと噴き零していた。

頭上から滴る粘汁が、シスターヴェールをべつとりと濡らす。

「うあ……何これ。気持ち悪……!」

白い雨はひどく粘っこく、糸を引きながら頭上から顎先にまで垂れ流れていく。生理的嫌悪を催す粘感に、たまらず嫌悪の声を上げるイバラの姉妹。その間にも肉部屋は脈動を繰り返し、大量の白濁シャワーで紺色の聖衣を汚し続ける。その様子は、消化器官の蠕動ぜんどうを思わせた。

「そう。この部屋はわたしの口であり喉であり胃でもあるのです。そこに貴女は自ら足を踏み入れた……後は美味しく頂くのみ」

べろりと舌なめずりする美食家悪魔。真の姿を現した悪魔の肉部屋は、出口を閉じて獲物を閉じ込めた。

「ふ、ふざけないで！ 誰がお前のような下衆に食べられるのですか！」

逃走路は封じられ、最悪の足場では普段どおりの立ち回りは不可能。それでも強気に吼える獲物を本格的に食すべく、部屋中の肉壁が脈動する。床からも天井からも、巨大な口を開いた肉蛇が無数に突出した。

「くっ！」

咄嗟に距離を取ろうとするリーゼだったが、腐肉じみた床はひどく柔らかく、力を込めて踏みしめられない。それどころか溢れる粘液にぬるりと足元をすくわれ、その場でバランスを崩しそうになってしまう。

床から浮き上がった片足に、伸びた肉紐の一本が絡みついた。

「くっ、こ、この！ 離れろ……くあああっ！」

美脚を振り上げなんとか振りほどこうとするリーゼだったが、逆に太ももをギリギリと締め上げられ、苦痛の声を絞られる。極太の肉紐はがっちり食い込み、まったく離れようとしなかった。

（つく！ しまったわ……このわたしが、しくじった！）

気丈な美貌に、焦慮がよぎる。足を取られ機動力を殺されては、鈍重な悪魔に対する唯一の優位性まで失ってしまふ——

「くっ、だったら……！」

「ふ、遅いです！」

咄嗟の判断。左足に食い込んだ触手を引き剥がそうと、リーゼは腕を伸ばそうとする。だがそれよりも早く、新たな肉蛇が襲いかかった。

「!? くっ、素早いッ！」

シュルルル、ギチィィ！ 反応する間もなく、ロングクラブに触手が食い込む。ぬかるむ足場のせいで思うように動けず、リーゼは為す術なく触手に四肢を絡めとられてしまった。

（つち、しまった……読み違えたか！）

自分の判断ミスに、苦々しく歯噛みする執行者。これまでの鈍重な動きは、敵を欺くためのカモフラージュだったのだ。足場の悪さもあるとは言え、十八番のスピードでまで敵に圧倒され、焦慮が走る。

「ふふふ、捕まえましたよイバラの姉妹。しかしこうして改めて見てみますと……ふうむ。なんとも非の打ち所のない食材だ」

眼なき瞳が、じつくりと獲物を視姦する。むつちりと肉を付けながらも、瑞々しく引き締まった極上の太もも。タイトスカートを膨らませている尻果肉も楽しみだし、たわわに実った両巨乳のポリウムたるや、想像するだけで涎が溢れてくるほどだ。白濁にまみれなお気丈さを失わない生意気な表情が、いつそう食欲をそそり立てる。

「た、たまりませんねえ……涎が溢れてきますよ、じゅびっ」



肉塊じみた本体が、喜悅のあまりブルブルと震える。肉部屋中から大量の白濁が溢れ出し、ぼたぼたと垂れ落ちて獲物の身体を濡らした。

「ふ、ふんっ！ 変態め……見ているだけでもう我慢できなくなつたの？ 美食家だなんだって、とんだマナー知らずじゃないの」

おぞましい粘感に身震いしながらも、リーゼはあくまで強気を貫き続けた。持ち前のプライドが、弱みを見せる事を許さないのだ。

「ふふふっ、肉質は当然として活きも抜群にいい、貴女のような食材を調理できるのは、料理人冥利に尽きますね……このン・ザユ、今宵は最高の料理が楽しめそうですよ。想像しただけで……ジュルリ」

だがそんな気丈さは、悪魔の食欲を逆にそそるだけ。床からも壁からも新たな口腔触手が現出し、囚われの聖女に集っていく。そのどれもがビクビクと逞しく脈動し、丸口から大量の白濁を吹き零していた。

（う……な、なんて気持ち悪いヤツなの。本当、最悪じゃない！）

怯えは決して表情に出さない。そんな気丈なシスターだったが、迫り来る肉獣の群れを前に、やはり不安は拭えない。

これまで悪魔と戦い続けてきたリーゼにはわかっているのだ。悪魔とは最低最悪の下衆だ。こいつらがやる事は、いつも決まってる――

「ふふふ……それでは、さっそく味見させて頂くとしますか」

「くうう……う、んくつつ！」

ぬる、にちゅつ。白濁まみれの極太い肉塊が、聖女の肢体に絡みつく。最初に狙われたのは、やはり熟れた肉体の中でもっとも魅惑的な部分——修道服をパンパンに押し上げて挑発的に存在感を主張している。Gカップオーバーの美巨乳だ。二匹の大蛇が根元からとぐろを巻き、スーツの上からぎゅうう、と乳房を揉み絞る。

（くうつ……や、やっぱりね。本当に、どうしようもない下衆！）

予想どおりの下卑た行動に、リーゼは内心毒づいた。

言動同様、ン・ザユの触手は最悪だった。脂肪じみた肉紐は大量の白濁を含み、ブヨブヨととらえどころのない感触がおぞましい。それなのに動きはひどく遅く、執拗な蠕動で両の乳肉を揉み潰してくるのだ。脂肪さながらの柔塊にぎゅうぎゅうと揉み込まれ、溢れる白濁をスーツ越しにたっぷりと乳肌塗り込まれる。

（う、くうつ！ この体液、なんて粘りなの……。それにこの感触。ブヨブヨしてるのにしつこくつて……ほ、本当に最悪よ！）

気丈な聖女でも、言葉さえ失ってしまうほどのおぞましさ。そんな汚塊に何度も何度もおっぱいを揉み込まれ、執拗に濁液を刷り込まれる。たまらない嫌悪感に、リーゼは巨乳を揺すり懊悩した。

「ほおお……これはこれは。見た目どおり、いやそれ以上に素晴らしい逸品だ。若い女性特有の柔らかさは元より、きつく責めても反発するだけの弾力も兼ね備え……ほほ、どれだけ揉んでも飽きませんよ」

嫌悪を露にする聖女とは対照的に、美食家は大満足の様子だった。喜悦に震える肉触手が、何度も何度もしつこく乳房を弄り回す。

若々しい美峰はどれだけ責められてもカップを崩さず、つんと生意気に前方を向いたままだった。強く肉紐を食い込まされてぐにやりと撓たがまされても、弾けんばかりの瑞々しさですぐさま押し返しも元の形を取り戻す。そんな生意気な抵抗が逆に楽しくて、悪魔は何度も何度もひたすらねちつこくおっぱいを揉み続けた。

「むう、味わえば味わうほど魅力的で……極めて濃厚なのにまったく飽きが来ません。いいですねえ、いつまでもこうしていたいですよ」

「ふ、ふん！ 生憎だけどわたしはもう飽きたわ。おっぱい揉むしかできないなんて……ふあ！ ま、まるきりガキ……くう、んああつ！」

ぎちゆ、と強く根元を締め上げられ、生意気な反論を黙らされた。執拗極まる搾乳のたび息は荒くなり、漏れる声は甘さを孕んでいく。

(くうっ……な、なんてしつこいのよ。胸ばかり、いやらしい……！)

どれだけ気丈に振舞っても、やはりうら若き女性。女盛りの完熟ボディは、その官能的

すぎる外観同様、その中に聖職者として許されない肉欲を孕んでいる。ローション代わりの白濁液をヌルヌルと塗り込められ、しつこくしつこく揉み込まれ続けられ、普段持て余している性欲を煽られないはずがないのだ。汗と粘液でびっちりと密着した薄生地には、充血した乳首が淫靡な陰影を浮かせてしまっている。

「はあ、はあ……ふ！　笑わせるわね……何が魔界最高の料理人よ。げ、下水道の中のスライムのほうがまだ上手かったわ……あ！」

だがリーゼは、あくまで気丈を崩さない。いつもどおりに悪態をつき、自らの心を鼓舞する。四肢を拘束され肉部屋に囚われた絶体絶命の危機でも、イバラの姉妹はまったく抵抗心を失っていないのだ。

「ほほう、言いますね。ですが失礼、わたしはまだ味見をしているだけの段階。それなのに、貴女の身体は反応を示しているようですが？」

まな板の上でさえ抵抗してくる最高の食材に、ン・ザユは嬉しそうに応えた。しつこく乳肉を揉み続けていた肉蟲が、苦しうに揺れる巨乳の先つちよにその口先を向ける。当然、その狙いは――

（くう……ち、乳首……くるっ！）

しゆる、きちゅっ！　スーツから浮き上がってしまったっている勃起乳首を、ピンポイントに締め上げられた。そして、シコシコと扱くように愛撫される。

「くあ……は、んんあつ！」

瞬間、駆け巡る甘く切ない稲妻。もつとも敏感な場所を攻撃され、リーゼはたまらず甘い声を上げ悶えてしまう。

「ははは、可愛い声で泣くじゃないですか。貴女、これほど立派なものをお持ちなのに、実は随分と敏感なんじゃありませんか？」

「なっ……ち、違……つあああまたそこ、ち、乳首ばっか……ああ！」

にゆる、くちゅっ！ 反論した瞬間、再びきつく乳豆を舐め上げられた。同時に今までの以上の激しさで両胸を揉み込まれ、根元と先つちよとを同時に可愛がられる。巨乳を蕩かす二種類の乳悦に、リーゼは悪態をつく事もできず悶えるしかなかった。

（くっ……さ、最悪だわ。よりにもよって胸ばかり責めてくるなんて……くうう。ダメ、胸は、しつこくされないようにしないと……）

料理人の見立ては正しかった。熟れた女体の中でも一際発育のよい双巨乳は、挑発的な生意気さとは裏腹、ひどく敏感な代物なのだ。

魅惑的すぎる媚肉はこれまで数多の悪魔の標的とされ、見た目以上に淫らな代物として開発されてしまっている。普段は鋼の信仰心で押さえ込んでいるものの、こうして執拗に可愛がられれば、罪深い本性は抑えようがない——

「はあ、はあ、はあ。む、無駄よ……胸なんて、いくら揉まれても……ふあああ、あ、あ

「あああ！」

「聖職者ともあろうものが嘘はいけません。やはりわたしの目に狂いはなかった。どうです？ おっぱい、気持ちいいですか？」

慇懃いんぎんに語りながら、乳責め触手の動きをいつそう激しくする。乳峰を根元からぎゅううつと搾り上げ、密着スーツに乳首を浮かせてシゴキまくる。痛いぐらいの強さで振りながらも、粘液をローション代わりにして快感だけを際立たせてくるやり口が、ひどく陰湿だった。

「どうですか、答えてください。ほら、ほら！」

「はっ、き、気持ちいいわけ……くう！ お、おっぱいこんなにヌルヌルにして……はう！ さ、最悪……最悪に決まってるでしょ！」

クチュクチュと乳首を弄られるたび、あまりの切なさに泣き出したくなってしまう。だが溢れそうになる嬌声を喉奥で噛み殺すと、リーゼはあくまで強気に吼えてみせた。屈辱に涙を滲ませながらも、射殺さんばかりに鋭い瞳で悪魔を睨みつける。

「ふんっ、適当におっぱい揉むだけで、女の扱い方も知らないんでしょ……んんっ！ 魔界の貴族とやらは、早漏の上に下手糞なのねっ！」

四肢を縛り上げられた状態でも、動かせる場所だけで反撃する。好戦的なシスターの毒舌は、未だ健在だった。

「おや、これは失敬。胸だけでは不満でしたか。あまりに魅力的なのでつい固執してしま
いまして……これは、そのお詫びです！」

必死の罵りを、悪魔貴族は軽く流してみせた。だが実際にはプライドを傷つけられたの
だろう、四肢に巻きつけた太触手に力を込め、不埒なシスターをギリギリと締め上げてお
仕置きする。

「うあつ、痛ッ！」

胸への甘い責めとは違う熾烈な苦痛に、リーゼはたまらず苦悶の声を上げた。痛みに震
える両手はそのまま真上に引つ張られ、頭上で組まされて屈辱的な屈服ポーズを強制され
る。ノースリーブの裾口から、汗に濡れた脇口がセクシーに晒された。

「料理は盛り付けも重要ですからね。ふふ、似合いのポーズですよ」

（くっ！ 屈辱だわ……このわたしが、こんな格好なんて……！）

完全屈服の姿勢を強制され、プライドが屈辱に軋む。だが気丈なシスターは羞恥を表に
出さず、むしろそれをバネに抵抗心を燃え上がらせた。涙の滲む瞳でキッと悪魔を睨みつ
け、必死で牙を剥く。

「ふふ、いい目だ。その表情素敵ですよイバラの姉妹。さあて、その鮮度を保っている間
に、まま本格的な調理に入らせて頂きます」

「な、何を……うあ、くううっ!!」

ぬるり、と新たな触手が真下から伸びる。乳房に巻きついているものより二周りも太い、男性器を思わせる形状の卑猥な肉根が、下腹部を撫で上げながら両乳房の谷間に滑り込んだ。そしてその乳圧を楽しむように、にゆるにゆると上下運動を繰り返す。

「おお！ 揉み応えも抜群でしたが、こうして挟んで頂くのもなかなか……くふふふつ、これはどう仕上げるべきか迷いますなあ」

「んあつ、な、何言ってるのよこの変態……くう、や、やめなさい！」

ねちっこい搾乳はそのままに、中心部ではパイズリさながらの淫辱運動でおっぱいを味わわれる。自身の肉体を性玩具として弄ばれている屈辱に、リーゼは声を搾り上げて反抗した。

「ふほおお、い、いい。これはいいですよ……イバラの姉妹の巨乳包みパイズリ風味、まずオードブルはこれで行くと思いますか！」

「な、何わけわからない事ほざいてるのよ変態……や、やめなさい。わたしの身体は、お前ごときが触れていいものじゃ……ふあああつ！」

じゅぽ、じゅぽつじゅぽつ！ 男根触手のピストン運動が激しさを増し、何度も何度も乳谷を抉られる。同時に搾乳触手も動きを変え、縛った乳房を左右に動かして中央の肉棒に押し付けてきた。押し付けられた乳肉がむにゅむにゅと撓み、悪魔の男根を楽しませる。「ふお、ふおおつ！ いい、いいですよこの感触……素晴らしい弾力に柔らかさ、そして

豊潤な肉感！ 粘液と汗に濡れた法衣の感触がアクセントになって……エクセレント！
三ツ星のパイズリです！」

「なっ……何言ってるのよ！ パイズリなんてしてないでしょ、こ、こんなやめ……ん
あああ！ や、お、おっぱい、激し……いいっ！」

自慢の美乳を触手に操られ、醜い男根に強制的に奉仕させられる。イヤイヤと身体を振
つても、悪魔の調理は緩まない。

（こ、こんな……屈辱よ。わたしのおっぱい、悪魔に好き勝手にされて……こんな、楽し
まれてるなんて……！）

為す術もなく拘束され、自分の身体を料理として楽しまれてるなんて——気位の高い
美女にとつて、許し難い恥辱だった。惨めな敗北感に、悔し涙が浮かぶ。

だがそんな反骨心とは逆に、熟れた肉体は悪魔の調理によって徐々に出来上がりつつあ
った。大量に塗り込められた粘液のトロミが痛みを軽減し、おぞましい蠕動が快美なもの
として倒錯する。時折乳首をコリコリと刺激されるのが、絶妙のアクセントとなって女を
喜ばせた。

（くうっ……こ、こいつ！ しつこいだけじゃなくって……はああ。こんな、感じるやり
方ばかり……う、上手いじゃないの……！）

もはや、認めざるを得ない。自身を魔界最高の料理人と豪語するだけの事はある。ン・

ザユの女の扱い方は、極めて熟達したものだつた。

「はあ、はあ、はあっ……く、うう！ こ、こんなあ……ま、また乳首……んあああ！ お、おっぱい……しつこすぎ……いいっ！」

乳房は蕩けそうに疼きを増し、ピンピンに勃起した肉豆は痛いぐらいにシコっている。嘔み殺そうとしても、甘い声が漏れるのが止められない。細くくびれた腰は、いつしか悩ましげに動き始めていた。

「ふふふ、気持ちよさそうですね。どうですか、そろそろ正直になれたでしょう？ さあ認めなさい、わたしの料理は魔界最……」

「さ、最悪っ……くううう！ あ、あんたのやり方なんて全然気持ちよくないわ……ふあああ、お、おっぱい……最悪、最悪よおっ！」

半ば悲鳴のような声で、リーゼは魔界料理人の言葉を否定した。悪魔の触手に肉悦を覚えていたなど、気丈なプライドが決して許さない。

「……やれやれ、食材としては最高ですがマナーは最低ですね。その言葉遣いを知らない口、わたしが教育して差し上げます！」

プライドを傷つけられたのは、ン・ザユのほうだった。慇懃な言葉遣いのまま、怒りも露にパイズリ触手を突き上げる。乳谷をズルリ、と滑った亀頭状の先端が、そのまま聖女の唇へと突きこまれた。

「ふぐっ……ん、むうううう！ い、いや……んむ、ぢゅぶっ！」

咄嗟に唇を閉じるリーゼだったが、触手のパワーには抵抗できない。健気な抵抗は一瞬で突き破られ、力任せにお口の中へ挿入される。

「んむぁ……ふ、んぐううううっ！ んむう、ん、んん〜！」

（い、いやっ……口にまで入れられるなんて……くうう。太くて臭くって……さ、最悪じゃないの……！）

含んだ瞬間充滿する、濃密極まる雄の発情臭。外見の通り、ン・ザユの男根触手は生殖器に値する機能を備えているようだった。膨張しきった亀頭からは、イカ臭い先走りが見えたらだと噴出している。

「ふふふ。わたしばかり楽しむのも悪いですからね。極上のワインにも勝るわたしの精液の滋味、存分にその舌で味わってください」

「んぁぁ……い、いやっ、いやよ。こんな汚い……んぶ、んうううう！」

咄嗟に吐き出そうとするリーゼだったが、口腔奥にまで侵入した触手は吐き出せない。舌先で押し出したり噛みついたりと抵抗するも、極太の肉蛇には文字通り歯が立たなかった。それどころか刺激を与えたぶんだけペニスを悦ばせてしまい、いっそう大量のザーメンを飲まされる事となってしまう。

「う、あ、あぁぁ……んぶうううっ！ はぁ、はぁ……うぁぁぁ！」

ドビュ、ドビュッドビュドビュドビュ！ 熟しきつた濃厚すぎる白ワインが、これでもかとはかりに口内に注ぎ込まれた。

「んぶあ……あ、ああああつ！ いやあ、い、いきなり出すなんて……んぶう！ くうう、す、すごい量……むわあ、んむうううつ！」

流し込まれる雄液を嘔下えんげすまいと、リーゼは必死になって息を止めた。そんな抵抗を続ける間にも触手搾乳は続き、乳峰から喉奥に至るまでの長大なストロークでピストンされり。抜き差しのたびお口の中をぐちゃぐちゃに掻き回され、極太い亀頭に舌先や内頬を擦られた。

「ふあ……あ、あう……んふうううつ！ やあ、こ、こんなに激しく……んむう、ちゅぶつ！ はあ、はあ……ん、んむううう！」

駆け巡る苦痛と肉悦に、いつまでも息を止めていられない。その上ピストン亀頭は射精を続け、お口の中はもうザーメンでいっぱいだ。窒息寸前までなんとか耐えきっても、それ以上は凌げなかった。新鮮な空気を求めて自然と喉が動いてしまい――

「さあ、遠慮せずお飲みなさい……わたしの自慢の濃厚な白ワインです。何百年も熟成してありますからね、いい香りでしょう」

「ん、んむう……ごく、ごくつ！ いやあ……く、臭い……んくつ。ごく、ごく……ごくんつ！」

拒絶の声を上げながら、リーゼは悪魔の汚精を啜り飲んでしまう。

（う、うああつ……濃い、濃すぎよ！ 最悪じゃない……悪魔のものを舐めさせられて、こんな汚いものまで飲まされるなんて……！）

たまらない恥辱と敗北感に、心が軋む。だが屈辱に涙しながらも、リーゼは注ぎ込まれる白濁を飲み続けるしかなかった。

悪魔が自慢げに勧めてきた白ワインの味は、まさしく最悪だった。喉越しはねっとりとしつこく、痰のようにいつまでも絡みつく。味は濃厚そのもので、人間のそれを何十倍にも濃縮したような雄臭さだ。そんな特濃ザーメンが、止まる事なくドボドボと注がれ続ける。

「んぶあ……はぶ、ん、んぶうっ！ いや、だ、出しすぎ……んぐ、ごく、んぐうっ！ ぬ、抜いて……こんな、はぶ、んむううう！」

「おや、遠慮しなくても結構ですよ。お代わりは無料になっていますから、満足するまでいくらでもお飲みください」

すべてを飲み続けて、なおも窒息しそうな錯覚を覚える。イヤイヤと首を振るリーゼだったが、悪魔のシエフは食事の拒絶を許さなかった。強制パイズリの前後運動を繰り返して、喉奥までをピストンしながらなみなみと極上ワインを注ぎ続ける。飲みきれないザーメンが唇から溢れ、細頸を伝って今も責められ続けている巨乳へと滴り落ちる。

「くふうう……そ、そんな、もういや……んぶううっ！ んああまた出……んあああ、む、胸も激し……んぶあ、んう、んむうう！」

激しいフェラチオのたび、乳谷も強く摩擦され、熱い淫悦が止まらない。胸と口を同時に犯され、リーゼは屈服ポーズのまま悶絶した。

（くうう……さ、最悪だわ。このわたしが、こんなゲスに……！）

見下していた悪魔にいいように弄ばれ、何の反撃もできない。そんな情けない自分が許せず、悔しさのあまり涙が滲んでしまう。

「むふふ、いいですよその表情。やはり貴女のような生意気な牝は、こうして屈辱のスパイスで味付けるのが一番だ。ふふ、それではそろそろメインディッシュへ……と、その前にこれはサービスです」

「んぶああ……ん、ぶああああっ!？」

どびゅっ！ どぶどぶどぶ！ 勃起亀頭が一際大きく脈を打ち、大量の白濁をぶちまける。最後に最後に一際濃い精粘をブチまけると、口腔を犯していた肉棒がずると引き抜かれていく。

「ん、ぶあああ……あ、あぶう……こく、んっ……くうう」

形のいい唇と醜悪な亀頭の間、唾液と精液とが混じりあつた粘体が橋をかける。飲みきれず零れた白濁が、細頸まで垂れ落ちた。

「はあ、はあ、はあ……く！　こ、この……殺す！　貴様っ……絶対八つ裂きにしてや……くふう、ふああああっ！」

息を整えるよりも、罵倒の言葉を優先する気丈なシスター。だが吐き出された悪罵は、すぐさま甘い喘ぎに取って代わられた。新たに伸ばされた悪魔の触手に、休む間もなく次なる責めを追加されたのだ。

ヒルに似た触手が、数匹まとめてスカートの中に潜り込む。

「やつ……ちよっ！　ど、どこに入って……んああああっ！」

内股気味に太ももを閉じようとするリーゼだったが、それより早く、何匹もの肉ミミズに腿肉を噛み責められた。乳辱による甘悦とは違う鋭い痛みに、たまらず両足を痙攣させるイバラの姉妹。痛みにプルプルと痙攣する肉感的な腿肉を、ヒル触手たちが吸引する。

「くうう、う、ううっ！　す、吸われ……ふあ、ああああっ！」

じゆる、じゆるじゆる！　タイトスカートの内部で、下品な水音が連続する。美食家の悪魔の狙いは、柔らかな腿肉だけではないのだ。その目的は、これまでの調理でたっぷりと搾り出した、もつとも美味な——そして、聖女にとっては恥ずべき女としての敗北の証——

「ふほほほ、甘露、甘露！　やはり身体は正直ですね……口では最悪だ下手だと言いながら、こんな濡らしているではありませんか！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

美少女達を絶頂しまくる
粘液まみれの快樂地獄!!

粘獄のリーゼ

原画:竜胆、楠木りん シナリオ:黒井弘騎 原作:竜胆

びっちょりとした衣装に
染み込み汚す粘液蚕!!



◇価格:パッケージ版/ダウンロード版 3,000円+税◇OS:Windows Vista以降(日本語版)◇触手異種姦粘液まみれアドベンチャーゲーム◇女性フルボイス◇
※18歳未満の方はご購入できません。

パッケージ版・ダウンロード版ともに **好評発売中!**

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
着刊日は奇数月
発売!



コミック O.M.I.C.
UNREAL
オムニバス

正義のヒロイン
姦獄
ファイル

あなたのキモチイをお手伝い! キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

3D 美少女 恋愛 小説 シリーズ

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!

フリタム120%!? ショールにさらわれないドキドキ★ラブ!

呪詛喰らい師

リアルドリーム文庫

女刑事美優
悪魔は自らの身体で...

あとみつく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

二次元ぶち文庫

ハルク

あの人気作品の外伝作品もあり!電子書籍でしか読めないライトノベル!

「小説家になろう」の男性向けサイト「ノクター」の男性向けサイトから書籍化!

異世界お茶会
デキる妹
100%ラブ

ドキドキラブなライトノベル!

姫騎士 クラスメイト!
ビギニングノベルズ

二次元ドリーム文庫